私の博士論文執筆体験談
― 自分の研究の意義を自覚化した3年間 ―

平成18年３月修了生　**平舘　善明**

Ⅰ．はじめに；自己紹介

(1) 経歴

・東京学芸大学：学部 → 修士課程 → 博士課程

・芝浦工業大学工学部教職課程特任講師

修士課程3年間、“ドクター浪人”等、博士課程入学前に幾多の挫折経験あり。就職は単なる幸運。

(2) 博士論文に関して

・教科教育（学）の歴史研究。題目；「教材論にみる岡山秀吉の手工科教育論の特質と意義」

Ⅱ．3年間の経過

(1) １，２年目

・研究の大枠の設定

・学会発表と論文投稿

当時、関連資料は膨大にありながらも、一級品の原史料はなく、D論の水準を満たす論文構成への漠然とした不安があった。しかし、とにかくまず学会論文を書くことで歩を進めた。研究の大枠を意識して主要な先行研究を検討し、その分野で残されている課題を１点ずつ乗り越える学会論文を書くことをくり返す。

論文作成は、学会発表時期をペースメーカーとした。学会発表の時期は限定されるため、論文が書けたら学会発表を考えるのではなく、まずエントリーして発表時までに間に合わせる感覚。発表時には、投稿論文の形式に仕上げておき、発表で大きな問題点を指摘されなければ即投稿。こうした流れをくり返すことで、何とか年間２本の学会論文を書くことができた。

(2) ３年目

・前年度３月中間審査会 → ９月予備審査会 → 12月９日D論提出 → ２月最終審査会

当時は、D論の柱となる学会論文はつみあげられたものの、それらの成果を再構成してD論として１つのものにまとめあげるための、いわば仮説が立たずに、半年以上も序章を書きあげることに費やす。幾度となく最初から書き直し。３日間研究室に泊まり込んで翌日は家で寝る生活。後輩の学部生が枕をプレゼントしてくれたこともあった。とにかく四六時中、資料とにらめっこ。結果、10月中旬のある日、仮説がついにパッとひらめく。あとは勢いで書きあげて、D論を提出。

Ⅲ．3年でD論を書き上げられた契機

(1) 複数の指導教官からのアドバイス

自分の研究ないし論文に直結する内容の指導をお願いする。私の研究のオリジナリティーは、教育史研究ではめずらしい教材の復原。アイデアは主指導教員（千葉大）が龍骨水車の復原をしていたことを参考に。木工の復原は、副指導教員（横国大）が木工の専門家であり、毎週つきっきりで指導をうけた。落としがちな女子教育の視野と教育史でおさえるべき事項は副指導教員（埼大）から。大学時代から師事していた指導教員（東学大）には、２週間に１度の論文指導。論文締切り前には徹夜で指導をお願いしたこともあった。

多大学にわたって指導を受けられるのは連合大学院の強み。たくさんの資料を調べるより、その道の専門家に聞いた方が大幅な時間短縮。定期的かつ緊急時に指導してもらえる関係づくりは大切。

(2) 研究会・国際学会等への積極的参加

１人でこもって研究していると、重箱の隅をつつくような研究に陥りがち。いろんな場に出ていくことによって、「借り物」ではない自分の研究の意義が磨かれ、自覚化されていく。

①研究会；自分の問題意識を鋭敏にしてくれる場。教育現場の悩みや思いを共に背負う。“自分の研究は間接的にでも現場の先生方の役に立つものになっているだろうか？”と無意識に自問自答。

②国際学会；海外に出ると、学校制度からして違うので、当たり前のことが当たり前でないことに気づかされる。“学校論として、そもそも小学校とは？”等、自分の研究の前提を疑う良い機会。

③研究室；ゼミ長等、学生運営に責任をもつ。後輩の卒論・修論指導や自主ゼミの開催。他分野の資料・情報収集（＝研究の幅の広がり）→後輩へのアドバイス→指導教員の当該学生への指導を見学→指導のノウハウを実感もって会得でき、かつ客観的に自分の論文を見る目を養うことにもつながる。

④合同ゼミナール；D論執筆をめざす仲間との交流は、“愚痴と示唆とやる気”の宝庫。苦しいときに、“あいつも頑張っているはず！”という心の支えになる。ぜひ、大いに交流を。

(3) 日本学術振興会特別研究員の研究助成とそのための申請書作成

助成金を得ることで、経済的な心配をせずに研究に没頭できた。しかし、たとえ当たらなくても申請書の作成は、自分の研究の意義を、審査員である他分野の人にもわかってもらえるように、端的にかつインパクトをもって文章を書く良い訓練の場となる。この経験は、就職した今でも大変役立っている。私は２度はずれて、３度目に当たった。当たりはずれは、運もある、宝くじのようなもの。でも、出さなければ当たらない。申請書を書くだけでもいい経験になるし、当たれば10枚程度の申請書で数百万の助成金が得られる。ぜひ、積極的にお試しを。

Ⅳ．おわりに

(1) はじめの２年間は、“自分がこの研究をやらなきゃ誰がやる！”という自分の研究と自分自身の存在“意義”の自覚を深める時。最後の１年間は、まさに、“99％の努力と１％のひらめき（＝仮説)”。ひらめきがでてくるまでどれだけかかるかわからない。そこでひらめく、ないし頑張りきるためには、２年間でつちかった“意義”が大きな鍵・支えになる。

正直、論文を書くノウハウやテクニックは、学会論文をかいていれば、指導教員の論文指導と学会の修正意見で身につくし、本数を重ねるだけ覚える。しかし、最後にD論としてまとめあげるには、意義の自覚化が絶対に必要。そのためにも、こもらないで広いエリアに自分を置くことが大事。

(2) D論は、せいぜい修士論文＋α。私は、修士課程時代の学会論文1本と博士課程での学会論文４本（『学校教育学研究論集』を含む）でD論を構成した。すなわち、D論は、修論の枠を広げて補完したもの。現在では、課程博士の水準は、その先ずっと続けていくであろう研究者としてのスタートラインとされる。壮大なものと捉えずに、ぜひ３年間で書き上げられる問題の設定・限定を！